

法語の世界

《原文》

思案の頂上と申すべきは、弥陀如来の五劫思惟の本願にすぎたることはなし。この御思案の道理に同心せば、仏に成るべし。同心とて別になし。機法一体の道理なりと云々。

〔蓮如上人御一代記聞書〕二百四十二

《現代語訳》

「思案のきわまりというべきは、五劫の間、思いをめぐらしておたてになった阿弥陀如来の本願であり、これを超えるものはない。弥陀如来のこの「思案のおもむきを心に受け取れば、どんな人でも必ず仏になるのである。心に受け取るといっても他でもない。「われにまかせよ、必ず救う」という機法一体の名号のいわれを疑いなく信じていることである」と仰せになりました。

撮 取 不 捨

撮取不捨（おさめ・たすけ・すくう）

おかげさまで八十五歳の人生を迎えることができました。老いの坂登りて後見れば急がぬ道の足の速さよ、電光朝露幻の如くなる一期なり。あらためてまぼろしの人生を実感しています。諸行無常・四苦八苦の人生。世の無常と理屈の上では知ったかぶりをしながらの私の生き様に戸惑い、一生懸命、人の名前を思いだそうとするけど思いだせない。風呂の水を止めるのを忘れて、出しっぱなし。お医者さんから頂いた薬。朝夕二回の服用も、飲んだかどうかあやふや……家内は「お父さんはこの頃、耳が遠くなったね」確かに聞こえが悪いと承知しながらも、家内の反応も鈍くなり、お互いにけなしてみたり、なすりつけてみたり、怒ってみたり、笑ったり人生いろいろ。晩酌の焼酎をお湯で薄めて呑むほどに、何とこれが一番の百薬の長と自負。子供四人、夫・嫁四人、孫十二人、ひ孫四人とにぎやかです。息子も娘も馬鹿な親父と知りながら、それぞれおだててみたり、すかしてみたり。娘たちはまあまあ弁護してくれるも、息子だけは猛反対。怒り腹立ち、つるばかり。家内が申すには「若い時のあなたも今の息子そっくりよ」 弁解の余地なし。父は七十五歳、母は百五歳で往生致しました。母のくちぐせは母「おらまだ死なれん」英正「何で死なれんの」母「心配がおおくて死なれん」英正「何が心配で死なれんの」母「おまえのこつが心配ぞ」ギャフン。年を重ねるにつれ心配が多くて死なれんというのは、他人事ではないと痛感しています。我他彼此一ブリブリ・ねちねち・いらいら、困ったものです。そんな私に、逃げ回るを追いかけ追いかけ、撮取不捨とはありがたいことです。南無阿弥陀仏

平成二十七年五月

釈英正

左記掲載コラム欄文章は、十月十日、当山で開催された研修会の資料でいただいた中であつたものです。

正念寺第十六代ご住職吉村

英正先生がお亡くなりになられるひと月前にお書きになられたものだそうです。

「ナイスミドル」という言葉があります。この文章を讀みながら思わず「ナイスシルバーだな」と口からこぼれでていました。

生前、有形無形に人として、社会人として、僧侶として生きていくことについて多くのことを教えていただき、ご指導くださいました。

この文書を読みながら、阿弥陀さまの撮取不捨のお慈悲分かり易く伝えてくださる英正先生の生前の優しいまなざしを思い出したことでした。生きていた時は「善知識」として阿弥陀さまに帰依せよとすすめてくださり、ご往生後は仏の広門示現相としての「還相の菩薩」として迷える私に寄り添い、支え、導いてくださることにただただ報恩感謝のお念仏申すだけです。素敵な文章を見ながら、お浄土で英正先生にお会いしたいと思つたことでした。

南無阿弥陀仏

二〇一九(令和元)年 金光寺報恩講のお知らせ

- 日時
- 十二月十五日 午前十時～ 日中法要(上下参り)
 - (九区・十三区・十四区地区)
 - 十二月十六日 午後七時～ 速夜法要(お番)
 - 午前十時～ 日中法要(中央参り)
 - (十区・十一区・十二区地区)

講師 福岡教区 西嘉穂組 長明寺住職
浄土真宗本願寺派布教使
花田 照夫 師

その他

お参りの際は、門徒式章、念珠と聖典(お経本)をご持参ください。

報恩講期間中の日中法要(午前十時からの法要)にお仕事等でお参りできない方は、十二月十五日午後七時からの速夜法要にお参りください。

報恩講は、親鸞聖人のお命日を縁として、浄土真宗の門信徒が手継ぎ寺にそろって参詣し、阿弥陀さまのみ教えに出遇わさせていただく、**浄土真宗では一番重要な法要・法座です。**是非、ご勝縁をお結びください。